

今こそ北海道の魅力を 道民あげて発信する時

インバウンドと医療

ここ数年新千歳空港の出発・到着ロビーでは様々な国の言葉が聞こえてくるようになった。以前は雪まつり期間が過ぎると外国人も目立たなくなり、平時の様相となったものが、今ではシーズン問わず英・中・露・マレー・韓と様々な国からの来道者で実に賑やかである。

政府が主導するCool Japan。官民挙げてインバウンドを取り込もうとする努力が着実に実を結んできた結果である。実に喜ばしい話ではあるがこのインバウンドになじまない業界もあることは事実である。かくいう私たち医療機関においては、お隣の韓国のメディカルツーリズムを複雑な気持ちで、端から見ていたのではないか。そうした中で政府が打ち出した医療の成長戦略のいくつかには、積極的に医療関連産業を国際展開していくことが打ち出された。

企業・自治体・行政の努力で多くの外国人が来道するのに比例して、当院を訪れる外国人患者も増えている。俗にいわれているメディカルツーリズムかというと必ずしもそうではない。当院を訪れる外国人の半数近くは隣国のロシアから、残りは北海道に観光・仕事で滞在中に不幸にしてケガ・病気となられた人たちである。

メディカルツーリズム

外国人に対する医療は大きく三つに分けられる。一つは前述のメディカルツーリズム。お隣の韓国ではまさに国の一大産業となっており、副次的な効果として観光業もセットで成果を上げている。まさに医療を目的に旅行業・観光業・ホテル業が相乗効果的に機能しているのである。

医療を目的とする旅行は古代ギリシア時代にさかのぼる。アスクレピオス（ギリシャ神話の医術の神）への聖地巡礼と絡めて温泉療養が行われていた。日本で昔から行われている湯治もいわばメディカルツーリズムの類となる。このこと自体は私たち日本人も古くからの習慣として違和感を持つ者はいないであろう。これもメディカルツーリズムである。



札幌東徳洲会病院国際医療支援室

トラベルメディカル

二つ目のトラベルメディカルは救急医療が主体となる。メディカルツーリズムは、検診・美容整形・専門治療と侵襲^{*1}を伴う治療から軽いものまで範囲は広いが、事前に情報を得て行われることは、共通している。一方、トラベルメディカルは予告なし、かつ、重篤なケースが多い。サハリン2^{*2}の現場からの事故搬送、航空路の太平洋線の機上で成田までもたずに千歳に緊急着陸し緊急手術、大通公園での心停止等々一刻を争うケースや宿泊先のホテル、領事館からの連絡で運ばれるものなど様々である。

私たち日本人が外国に行った際に医療機関のお世話になった場合感じる不安は、北海道を訪れる外国人も同様である。日本人も医療の心配がある国には観光といえどもなかなか足が向かない。治安と医療は国や地域を選ぶ物差しの一つになるのである。それらが水準以上でなおかつ風光明媚^{めいび}・文化・建造物・食・インフラ・サービスといったコンテンツがかみ合うと、他を一步も二歩もリードすることが出来る。地域自体の競争力が増すのである。まさに日本は治安が良く、高度医療技術もあるので観光地としての魅力度は高い。その中で更に北海道を選んでもらうことが大事である。

また、医療を伴う来日は滞在期間も通常より長く一定地域にとどまることになる。見舞客が訪問することもある。当院でも入院患者を見舞う・付き添うために来日した家族・知人のケースは少なくない。これらは必ず数日以上の滞在を伴い、観光のための業者を紹介したこともある。ホテルや観光地とすれば、営業せず

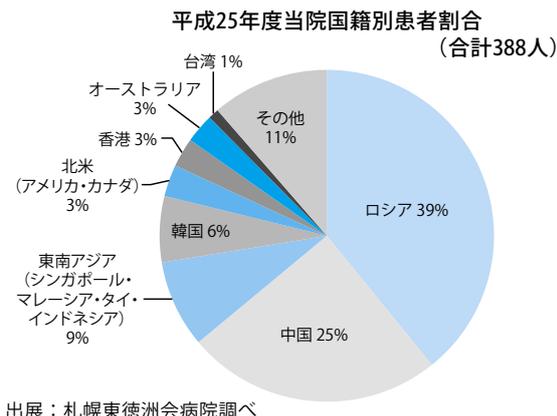
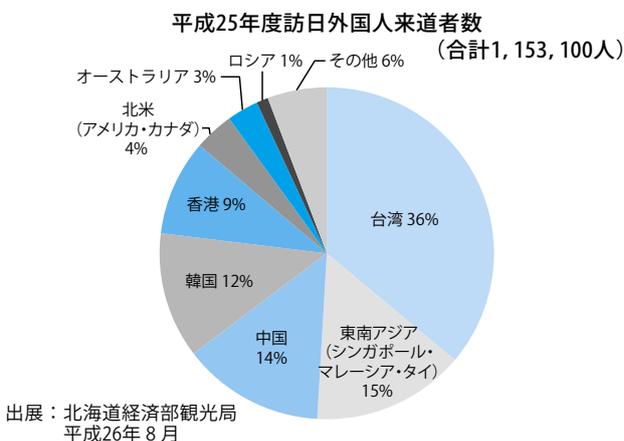
に飛び込んできた観光客のパターンである。元来患者側からの視点に立てば医療はフリーアクセスが一番いい。自分にあった医療を求めて多くの医療機関を選ぶわけである。世界水準以上の医療と、病院間の技術格差・機能格差が諸外国よりも平均化されている日本に外国人患者が関心を持つのもうなずける。もちろん円安がそれに拍車をかけていることも原因の一つであることは否めない。こうして他の産業との意図しない相乗効果が今起きているのだと思う。

^{*1} 侵襲
医療において、生体内の恒常性を乱す可能性のある外部からの刺激。外科手術など。

^{*2} サハリン2
ロシアのサハリン島北東部沖で行われている石油、天然ガスを採掘する大規模な資源開発事業。

当札幌東徳洲会病院（325床）は1986年に札幌市東区に開設した徳洲会グループでは北海道で二番目の病院で、救急を専門としている医療機関である。こうした病院の性質上、外国人来道者が増えると外国人救急患者も増えることは当然である。これまではその搬入状況も雪まつり前後をピークとする冬場が多くみられていた。しかしながら現在は季節要件は関係なく搬送されてくるのである。また、救急車を使うことなく自力またはホテルからも、救急外来に来る方が増えている。ここにきて、中国・東南アジアからの患者が顕著に増加しているのである。

これは、北海道を訪れる外国人とも一部分相関関係が見て取れる。一つだけ違うのは、当院はロシアからの患者が多く、これは完全なメディカルツーリズム（治療を目的とした旅行）である。既に重篤な手術・治療を終え、その後定期的に来院するリピーターも多い。一方、中国・東南アジアからの患者増は、札幌市や北海道あげて新たに東南アジアを意識したインバウンド戦略が功を奏していることを、医療の側面からも明確に表している。当院における中国・東南アジアの患者増は、ほぼトラベルメディカルだからである。



医療現場での外国人への期待

三番目は在留外国人ということになるが、北海道の場合は特定地域に外国人のコミュニティーが出来ているという話は聞いたことがない。もちろん全く在留外国人がいないわけではないが、本州や沖縄とは全く事情が異なる。圧倒的に数は少ない。

ただし、今後を考えた時に様々な産業で起きている生産年齢の減少、産業の担い手不足を補う手段は、全て機械化するか飛躍的に出生率を上げるしか解決策はない。機械化できる産業ばかりではない。当然外国人の労働力に依存する比率が上がることは容易に想像できる。

また、北海道の広大な土地・住みやすさは、海外の企業に対してもセールスポイントとなりうると考えている。こうした北海道全体のポテンシャルを考えた時に、医療の側面で連携は必須である。なぜなら医療と教育がないところに人は住めないからであり、産業も発展しないからである。

これらを踏まえて当院では更に外国人の対応をレベルアップしていくことを迫られている。既にJICA（独立行政法人国際協力機構）の外国人医師研修・日系人医療従事者研修や厚生労働省の指定による外国医師等が行う臨床修練病院として多くの外国人医師・看護師・医療資格者を受け入れている。新たに昨年末、厚生労働省の「医療機関における外国人患者受入れ環境整備事業」の拠点病院として選定をうけた。全国では10施設。北海道では当院のみである。今後は当院の持つ機能やノウハウを行政や自治体・他業種にも提供し、様々なシナジー^{※3}をつくっていくことが大事であると考えている。そのためには更に医療サービス提供体制の充実を図る必要がある。

国際医療支援室の挑戦

現在当院は国際医療支援室の増井伸高室長（救急専門医）のもと、中国人医師・モンゴル系中国人医師・インドネシア、マレー語が堪能な日本人医師をはじめとする多言語対応可能な専従スタッフ6名、かつ、院内全てで彼らをバックアップしていく受入体制をつ

くっている。英語・ロシア語・中国語・韓国語・スペイン語・ポルトガル語・モンゴル語・インドネシア語・マレー語の9カ国語に対応することが可能である。言語対応以外にも宗教や文化といった部分への配慮が少しでも伝わるように、礼拝所の設置や職員への語学教室の開催、宗教者や外国人講師を招いての勉強会を実施しており、さらに増えるであろう様々な国からの患者に対して一つ上の受入準備をしている。

宗教・文化を理解できずに患者の信頼を損なうことを少しでも回避でき、また、患者としても自国を理解するスタッフがいれば嬉しいサプライズである。北海道・札幌で一生の思い出を作ろうとやってくる旅行者にも、仕事で滞在中、不幸にして病院のお世話になる外国人にも、医療の側から少しでもお役に立つことが可能となるのである。自己満足かもしれないが、道産子としての役割の一部となるのかもしれないと思っている。

医療が北海道の大きな魅力に

札幌市は冬季オリンピックの手あげを準備していると聞く。東京オリンピックに備えて国は受け入れに関する様々な整備を進めている。札幌でのオリンピックが決定すれば英知を尽くして成功させなければならないであろう。そうした札幌市・北海道の事業としっかりと連携していくことが重要であると感じている。

札幌市には多くの医療機関が存在する。政令指定都市のうちでは、人口比に対する病床数が最も過剰な地域である。ただし、それは人口に対する厚生労働省の基準であるにすぎず、増加する来道外国人の視点から見れば、医療機関が少ないより多い方がいいに決まっている。このことは医療サービス提供分野において、来道外国人への安心面でのアドバンテージとしてアピールできるのである。この部分においては首都圏よりも競争力は高いといえる。このように視点を変えて、更に官民一体で多くの外国人に北海道をアピールしていきたい。微力ではあるがその思いを持ちながら、道民として外国人患者に北海道の魅力を訴えていきたいと思っている。

※3 シナジー

複数の企業が連絡したり共同で運営を行うことで、単独で行動するよりも大きな成果を出すこと。相乗効果。